

二次元ドリームノベルズ

でいふいと
挿絵 / 高浜太郎

変幻装姫

SHINE MIRAGE

シャインミラーズ2

活版に染まりゆく光

試し読み版

18
未 満



登場人物紹介

Characters



とうどういん さ き

東堂院紗姫

東堂院財閥の令嬢。怪人に襲われた時、聖なる光に包み込まれて変幻装姫シャインミラーージュへと変身できるようになった。



シャインミラーージュ

異世界からの侵略者である悪の組織ダーククライムと戦う変身ヒロイン。

ドルコス

ダーククライムの幹部。もの凄い筋力を誇るパワータイプ。



ミスティ

幹部の一人。ゴスロリ姿の少女。



デブロ

幹部の一人。豚型の人獣。



博士

ダーククライムの頭脳担当。怪人や戦闘員を作り出している。



第一章 屈辱の口淫調教

第二章 ダーククライムの罠！ 暴かれる秘密

第三章 逆襲のドルコス シヤインミラージュ公開レイプ!!

第四章 加速する変態調教

第五章 屋外雌豚散歩 刻まれる排泄快感!?

閑話 変態バニーヒロイン 屋上の淫ダンス

第一章 屈辱の口淫調教

これはミステイが楽しむ為に撮られていた、シャインミラージュの恥辱の記録。

ミステイの去った後、屋上に残ったのはエナジীর切れた変幻装姫へんげんそうきと強化戦闘員三人の合計四人。

その中の一人。美少女ヒロインは腹部を押さえながら、尻を高く突き上げた状態でふるりと震えている。

精液で膨れ上がっていた腹へと、深々と拳がめり込んだことで、溜め込んでいた白濁液が一斉に排泄された快楽に容易たやすくアクメを迎えてしまったからだ。

黒球も共に排泄穴へと降りていき、コスチュームを押し上げる形となっている。排泄物を漏らしてしまったかのような状態は、変幻ヒロインを更に無様に飾り立てる形となり戦闘員達の嘲笑の的となった。

「は、はへえ……お、おほお……チンポ汁う……ケツ穴から、出へますのほお……」

腹部へと走る鈍痛とアナルから迸ほとばしる強烈な快感。エナジীর切れた変幻ヒロインは、今はただの変態コスチュームに身を包んだ少女でしかなく、戦闘員に逆らう術すべを持たない。

「それじゃ、お楽しみといきますか」

「あくあぁあつ……お、お尻、そんなに揉んではあ……んひいいいい!!」

「今のお前は俺達の玩具なんだからよお。下品に無様に喘^{あえ}いでりやいいんだよ!!」

今は邪魔になるのだろう。黒球を外した戦闘員の両手が肉づきのよい敏感な尻肉を鷺掴みにし、感触を確かめ形を歪める為に力を入れ始めた。

グニグニと指が沈むかと思えるほどの力で捏^こね回されると、甘く蕩^{とろ}け痺れるような甘つたるい痺れが生み出される。

決して認めてはいけない心地よさに包まれながらも、戦闘員を相手に為されるがままと
いう屈辱が更なるマゾヒスティックな快感を与えてくるのだ。

極めつけは、無駄な抵抗を繰り返すヒロインへのお仕置きと言うように繰り返された尻
ビンタ。身体に響く怒声と共に放たれた、遠慮無しの痛烈な一撃は柔らかな尻肉を勢いよ
く震わせ、芯まで響く痛みが背徳的な刺激となつて駆け巡る。

「尻叩かれて気持ちよさそうな声出しやがつて。マゾ豚の癖に正義のヒロイン名乗つて恥
ずかしいと思わねえのか!!」

「……ち、違います、わ……わたくしはあ、マゾ豚などでは……あぎいいあぁつ……おむ
ううううう!! じゅぶぐう、じゅつぶ!!」

「うるせえつつつてんだろ!! その口もチンポ突っ込まれる為の口マンコでしかねえんだからな!!」

僅かでも理性が残れば現れる反抗心。ここまで無様な醜態を晒しても崩れることのないヒロイン然とした態度は、まだ屈服していない証。

だが悪の戦闘員にそんなものは関係ない。凜々しいヒロインが快楽に屈し浅ましくチンポをねだる姿を見たいという欲望に対し、反抗的な姿はむしろ彼らの嗜虐心を刺激するだけ。

必死に否定しようとしたところで、ツインテールを両側から掴まれ強引に上半身を引き起こされたかと思えば、髪が引き抜かれるような痛みに開いた口へと肉棒がぶち込まれた。口いっぱいに広がる雄の臭いと苦味。一気に喉奥まで占領されれば、同時に陰毛塗れの股間部へと顔が押しつけられる結果となり、視界も黒一色に染め上げられる。

(ああああ……また、こんなあ……口の中、滅茶苦茶にされて……味も、臭いも最悪ですのに……どうして、頭の中、蕩けてしまえますの……)

小さな理性が嫌悪を示すものの、刺激された本能が悦びを訴え、鼻が曲がりそうな悪臭が身体を燃えるように熱くさせ、苦味だらけの肉棒の味をも美味しいと感じてしまう。

デブロに調教された時に感じた味の違い。冷えた状態よりも新鮮な熱々精液を美味と感

じた現実が無理やりに蘇る。

「オラオラ!! 覚えてんのかあ変態ヒロイン!? チンポ咥えたらしつかり吸いついて奉仕すんだろうがよ!!」

「じゅぶるう!! んんぐう、ふお、ふおんら……おぶむう!! んじゅるるるうう!! じゅぶる、じゅじゅうううう!!」

(本当は嫌ですのに……でも、こうしないと……あはああ……頬へこませて、汚い音立てて……なんてはしたない……頭溶けるう……)

忘れたくてもあの屈辱的な調教の数々を忘れることはできない。勢いよく音を立てて吸いつくバキュームフエラは、数は少なくとも濃厚な調教を考えれば身体は嫌でも覚えてしまっている。

羞恥心を空っぽにして、ただの作業なのだと思い込みながら、熱く震える陵辱者の雄竿へと吸いつく。戦闘員の望んだ通りに頬を思い切りへこませ、空気と共に吸い込むかのようなひよつとこフエラ。

最初の敗北時に戦闘員にさせられた屈辱の記憶と連動させながら、髪を掴まれた状態で必死に顔を振る様は無様そのもの。

「前はその顔が見えなかったけどよお。今回はよく見えるぜ? いつも強気なヒロイ

ン様が蕩けた面^{ツラ}して、チンポに吸いついているのがなあ!!」

(み、見ないでえ……違いますのお……わたくしはこんなことされて、気持ちよくだなんて……)

戦闘員に指摘された通り、今回はミステイの手でバイザーが剥がされており、正体不明の変幻ヒロインの素顔が明らかになっている状態。

淫液に塗れた穢された素顔。戦闘員の言葉に反応して否定するように見上げるが、その瞳は普段の強気なものではなく、尻の下がった泣きそうなもの。普段の態度とのギャップがまた黒い雄を興奮させ、より強い征服欲を掻き立てる。

「ちっ、そっちはそっちで楽しそうだな。けど、俺もそろそろケツ穴味わわせて貰おうかねえ」

「んむぐう!? ひ、ひあ、ふおれふあ……んんぐうう!! んっじゅ、ぐじゅぶ、じゅぶるるるるうううう!!」

「奉仕を忘れてんじゃねえぞ!! 口マンコ使ってやってんだから、大好きなチンポ様にしっかりと吸いつきやがれ!!」

口腔^{こうこう}を犯されていることで思考から僅かに消えていたが、尻肉^{もてあそ}を弄ぶ戦闘員がいなくなつたわけではない。バキュームフェア奉仕と、ヒロインの見せるコケティッシュな表情か

ら興奮する仲間の様子に火が着いたのだろう。ゲグウつと尻たぶを左右に押し広げて、肉チンポによる串刺しのカウントダウンが始まった。

ビリビリとした淡い痺れが低い声と共に送り込まれ、奉仕を忘れて制止を訴えかけようとしたところで、掴まれた髪を引かれて強引に喉奥にまで戻されてしまう。

反射的に下品な音を立てて吸いしゃぶってしまうのは、調教の成果として仕方のないことなのだろうか。

「そうそう、今のでめえは正義のヒロインなんかじゃなくて、ただのチンポ穴でしかねえんだから、よお!!」

「んんんんううううッ?! んぶうおおお、ぐぶじゆるうううつ……じゅつぶ、おぼおおおお!!」

（おつほおおおお!! チンポ、チンポ入ってきへえ……そ、それに、これはあ……んおお!! くほおお、あひいいいん!!）

正義の心を嘲笑うようにして突き入れられる剛直。怪人に比べれば僅かに劣るものの、快楽に逆らえない雌を躡けるには十分過ぎる凶悪な肉棒の侵入は、あろうことかコスチュームをずらすことなく行われた。

神聖なコスチュームと共に肉棒に穢される背徳感は、デブロからの調教を瞬時に思い起

こさせ、敏感過ぎるアナルを埋め尽くされる悦びを隠すことはできなかった。

排泄穴を無理やりに押し広げられ、直腸を埋め尽くされる圧迫感。敏感な腸壁を強く擦り上げられ、まるでソーセージにされてしまったかのような錯覚。

たった一度の挿入だけで頭の中に次から次に思い浮かぶ様々な感覚が、僅かに残る理性を溶かそうと魔物となって襲い掛かる。

「デブロ様を見ててやりたいと思ったが、まさかこんなに早く叶うなんてなあ。おおおお!! チンポ引き千切られちまいそうなほどに締めつけやがつて、マゾ豚が悦んでやがる!!」

（違ふうう!! 悦んで、なんてへえ……んおおおおつ、ほおおおおん!! た、叩かれて、身体痺れてしまいますのおツ……ケツビンタ、やめてえ……ッ!!）

パンパン!! と、尻肉が激しく震える程に繰り返される猛烈なピストン。スパンキングを思わせるに十分な刺激であるが、悪の組織の一員がそれで手を休めるはずがなかった。

一度に多くの刺激を与え、それによる反応を楽しもうというのだろう。大きく振り被った腕が、風切り音と共に鞭のように白い美尻へと叩きつけられた。

「ケツビンタで悦んでねえで、もつと勢いよくしゃぶりつけよ。マゾヒロインさんよつ」
（む、無茶、ですわあ……頭の中、真っ白になりそうですのに……んおおお、おほお!!

ま、またビンタあ……でもお、チンポ吸わないとお……)

直腸を荒々しく搔き回されるだけでも、脳内が桃色の靄に包まれて思考が定まらないというのに、その全てを吹き飛ばさんとはかりに無情な一撃が繰り返されるのだ。

無理やりに咥えさせられた肉槍への奉仕に意識を割くことなど不可能。そう思いながらも若いぷりぷりの唇をしかとつけ、本能の赴くままに巨大な男根を追い求める。

「やればできるじゃねえか!! さてそろそろ一度目いくからよ。しっかりと受け止めてくれや!!」

「もう出るのかよ。早漏だなお前は」

口を犯す戦闘員の限界の声。嘲笑うは同様の強化戦闘員であるが、「うるせえよ変態が」という反応にニヤニヤとした笑みを返した。

「んぐむおおおおお!! じゅつぶ!! んぶじゅるるるううう!! んじゅぶるう、じゅぽおおおおお!!」

射精へ向けて自ら動き始めた戦闘員。髪を掴まれている為に完全に自由を奪われたまま、暴れ回るチンポに翻弄ほんろうされていく。

喉の奥に到達する度に響く、美少女ヒロインとは思えないひび割れた悲鳴。だが吸いつく唇は一度も離れることはなく、戦闘員の腰が引くのに合わせて伸びる下品なひよつとこ

顔を晒す。

本人は恨みに満ちた視線を送っていると思っているが、実際は乱暴にされ、直腸を犯されるマゾヒスティックな悦びに満ちたもの。

二人の戦闘員のチンポに串刺しにされながら、ビクビクと射精を促すように脈動する熱い肉槍の感覚を口腔で感じ取る。だからだと分泌され肉棒を濡らす唾液は、ご馳走を待つ獣のそれだ。

「そうら一発目え!! チンポ汁たつぷりと味わいやがれマゾヒロインがあ!!」

「んんんんんんううう!! んっぐ、ごく、ごくごく……んく、ごきゅ、ごつきゅん……!!」

何度も味わったこつてり精液。喉を焼くような熱さで流し込まれるそれは、相変わらず濃厚なゼリー状で絡みつく。

必死に流し込まないと口から溢れてしまいかねない量の白濁が次から次に注がれ、継続して行われているアナルピストンに合わせて身体を震わせながらも、懸命に喉を鳴らした。口腔から胃までもを穢される最低な汚辱液を味わいながら、飲んでいたものを吐き出すように、とろとろと割れ目からは愛液が滴り落ちる。

手綱のように握られていたツインテールが不意に引っ張られたことに反応し、ピタリと

止まる精飲。あのタイミングで最後だったのだろう。それ以降放たれることはなく、ググウつとゆつくりと腰が引かれていった。

勿論限界まで吸い上げていた口が簡単に離れることをよしとするはずもなく、まるで戦闘員のチンポを放すまいと必死にしゃぶっているようにも見えるだろう。

ギョボつと品のない音を立てて肉棒が引き抜かれた後に残るのは、大きく広がった口の中に残る射精の証。

「ああうっ……おおお、おっおおお……おおおお!!」

だらしなく開かれた口内の白濁がアナル陵辱のリズムに合わせて波打ち、快楽の乗ったものとは思えない間拔けな声が響く。

「ちゃんと覚えてるみてえだな。しっかりと俺のチンポ汁を飲まずに溜め込んでよ。まだ飲むんじゃないぞ」

(こ、このままだと、ケツマンコ犯される衝撃で……口から、漏れてしまいますわあ……おほおおおお!! い、いきなり、動かしてはあ……)

口腔内を支配する調教の証の味を覚えている最中に突如行われる体勢の変更。戦闘員の腰はガッチリと尻肉にぶつかっており、排泄穴に栓をする肉棒は奥深くにまで達している。四つん這いの状態から、ほっそりとした腰を掴まれて無理やりに抱え上げられたかと思

えば、立ちバックへと強制的に移行させられた。

仲間のことを考えることがなくなつた、自分だけのリズムで行われ始めたケツマンコ陵辱は加速度を増して腸内を暴れ回り、それに呼応するようにして乳首丸出しの淫肉が、汚辱液に満たされたコスチュームの中でたふんたふんと弾んでいく。

乳頭から滲^{にじ}む乳白色の液体。じんじんと疼く乳首は、犯されながらの搾乳刺激を求めているかようだ。

「さあ喉を鳴らして美味そうに飲め。飲んだら両手でピースサイン作りながら、あつち見てみな」

「はああおおおおつ……おんぐう、ごつくん!! あへああ……び、ピースう……あん、んおお!! あぐうつ……あ、あ……いやああああ!!」

ようやく認められた行為に、焦りながらも言われるがままに喉を鳴らして一滴残らず胃へと流し込む。そのまま自由な両腕を上げ、だらしなく口を開き舌を垂らした蕩け顔の前で指でV字を作り上げた。

圧倒的な屈辱はしかし、同等以上の興奮となつて淫らな身体を悦ばせ、尚も続く肉棒快感に快楽に染まった声が止まらない。

掴まれた髪を引っ張られ無理やり右へと顔を向ければ、そこには先ほどもで人質として

捕らえられていた三人の生徒の姿。

調教に関わっていなかった三人目の戦闘員が連れてきたのだろう。倒れる生徒達の横で、相変わらず下卑た笑みを見せていた。

今も眠ったままのようなのであるが、ミステイの支配下から解放された今、いつその瞳が開くかなどわからない。もしも意識が回復してしまったら、この陰惨な調教はたちまちヒロインのプライドや地位をへし折る悪魔のショーと化すだろう。

屋上に響く悲鳴は、ヒロインへの更なる恥辱調教の合図。愛液で丸出しの股間部を濡らし、露出している乳首も母乳が滲み、あまつさえダブルピースを崩さない哀れな変幻装姫は、戦闘員達の玩具にしかならなかった。

「ひ、ひやあ……あはあ……お願い、ですわ……彼らは、ここから……おっほおおおお!! んおおお、け、ケツ穴あ……すごひい……!!」

「負け犬ヒロインが生意気をお願いしてんじゃねえよ!! お前はこうしてチンポで善がつてりゃいいんだ!!」

勿論、今まで組織に歯向かってきた存在の懇願が聞いて貰えることなどない。むしろ戦闘員達からすれば無様に墮落していく様を見られれば満足なのだ。

生徒達を起こすかのようなアへ声を引き出さんとばかりに、直腸内を掻き回す戦闘員チ

ンポの勢いは増していく。

「起こされなくなったら、声を我慢しとけばいいんだよお!! オラオラオラ!! 神聖なコスチュームとやらも纏めて犯されてるつてのに悦びやがつて、マゾ豚があ!!」

「んんうう!! んほおおおお!! くひいいいうう……む、無理い……こんな、チンポされへえ……声、抑えられませんかのお……んおお!! おほおおお、あひいああ!!」

回数は少なくとも濃厚過ぎるアナル調教を繰り返したことで、既にヒロインアナルは完全に敏感な雌穴と化している。

生徒達を起こさないようにと、だらしなく開いた口を閉じたものの、ほんの数回力強いピストンを味わっただけで容易く開かされてしまった。

吐きたくもない弱音が、舌を垂らしながら無様に開いた口から零れ落ちる。ミステイの調教で磨耗した精神は、正義のヒロインの心を脆くしていたのだ。

「だったら諦めるこったなあ!! ほらよ、こいつらの前でミルク出して悶えちまえ!!」

「ひ、ひやつ……んああああ!! み、ミルク、いやああああ!!」

アナルを犯す戦闘員の武骨な掌が、乳首丸出しのエロコスチュームも纏めて、Gカップの牛乳を潰さんばかりに握りこんだ。

びゅるるるう!! 射精に似た強い快感が乳首から全身を支配し、射乳刺激によって脳

内がミルクのように甘く蕩ける。

「嫌じゃねえんだよお!! オラこつちも一発目だ!! ケツマンコをチンポ汁でいっぱいにしてやるからな!!」

「ち、チンポ汁……出してはあ……ッ! あひいいうう!! あ、んおおお!! い、イクう!! 戦闘員ザーメンでえ、け、ケツマンコイクうううううん!!」

拒絶の声も弱々しいままに、抵抗できない敗北ヒロインは排泄穴に悪の戦闘員の子種を注がれることとなった。

ギリつと、勃起乳首^{ぽつき}を押し潰されてミルクを噴出する極上のマゾ刺激に悶えながら、直腸を一気に満たす熱々のチンポ汁に一気に絶頂へのボルテージが限界を超える。

しなくてもいいはずの絶頂宣言は、正義のヒロインの敗北宣言に等しく、ゾクゾクとした背徳的な興奮刺激を刻みつけるのだ。

生徒達が目を覚ませば終了するヒロインとしての存在。それが更なるマゾヒスティックな快感となり、シャインミラージュの墮落の手助けとなる。

「は、はひいう……あはあ、あへええ……ミルク、搾らないでへえ……んおおつ……!!」

「まだまだ出るぜえ? にしても乳搾ればケツマンコの締めつけもよくなりやがる。本当に雌家畜に相応しい変態っぷりだな」

乳房に沈む戦闘員の指。大の大人でも掴みきれない変態ヒロインの乳房は、搾れば搾るだけチンポへの締めつけがよくなるスイッチのよう。

「ふう……出した出した。本当に最高だな変装姫様のケツ穴は。俺達専用の肉便器にしたいくらいだぜ」

手を離せば脱力した変幻ヒロインの上半身は地に堕ち、再び四つん這いの雌犬ポーズを取る事となってしまった。

ゆつくりと引き抜かれていく戦闘員チンポが腸壁をゴリゴリといやらしく刺激し、まるで小動物のように身体を震わせながら、悩ましい嬌声きょうせいを奏でるヒロイン。

肉槍が引き抜かれた後に残るのは、ポツカリと開いた汚らしい排泄穴を隠すかのように、奥に挿入された穢れたコスチュームの一部。

「休んでる暇なんてねえぞ!!」

「んひひひひひひッ!!」

バシイイーン!! 常人程度の力しか出せずに、疲労に満ちた敗北装姫に叩きつけられる大きく広い掌。

これも何度味わうことになっただろうか。大きな尻肉から感じる脳天にまで届く激感。最初は痛みと屈辱しか感じなかったスパンキングが、甘い痺れも混ざるようになってい

のを実感する。

（ち、違いますわ……わたくしは、こんな変態では……ああ……ケツ穴から、ザーメン漏れてしまいますのお……）

痛みの後に残る心地よい快楽。それを自覚しながらも、必死に否定する……いや、しなくてはならない。

正義のヒロインたる自分が、変態的な快感に身を焼かれて悦ぶなどと、決してあつてはいけないのだから。

だが心が拒絶しようとすればするどに、逆に身体は昂り求めてしまうという皮肉。ぶりゆりゆつと、コスチュームの隙間から漏れ出す白濁液の排泄快感が、心臓を高鳴らせる。

「はあう……きやつ!? こ、今度は、どうする気ですの……? い、いやああ!! どうして、こんな……」

不意に起こされた身体。大股開きの状態で無理やりに腰を下ろされたかと思えば、股間の下には眠り続ける生徒の顔。

仰向けに横たわる生徒の身体は、恥辱のお座りを強要されるヒロインの背中側で、顔だけが股間部の真下に位置している。

目を開けば、気高き変幻装姫のぐしょ濡れ恥穴を堪能することができるだろう。

他の二本への奉仕を忘れないままに、口を大きく開け、まだ味わっていない三人目の戦闘員の肉チンポを頬張った。

早く終わらせなければ。その一心で、口に含んだ肉棒を汚らしい音を立てながら吸引し、顔を前後に動かす。

「早速バキュームフェラとはわかつてるじゃねえか。正義のヒロイン様はもう一人前の肉便器だな!!」

戦闘員の言葉が屈辱を煽るが、今はそんなことを考えている場合ではない。一刻も早く三人を射精させなければ、何かの拍子に体勢を崩してしまう可能性はあるのだ。

しかし戦闘員達がただ奉仕されるだけで満足するなど、考えが甘かったことをすぐに思い知ることとなる。

（早く……早くしなければ……んあああ!? お、オッパイ、苛めるなんて……でも、これくらい、でしたらあ……あひいい!! ち、乳首い……!!）

口で奉仕していない左右の戦闘員が、奉仕されているにもかかわらず脚を動かし、今も母乳を滲ませる乳房を膝や足で無理やりに押し潰してきたのだ。

手と強い強い刺激にはならないものの、左右から感じる若干異なる快感に奉仕の動きは鈍り、時折勃起乳首が接触すればビリビリとした強い快感となってしまう。

「この体勢のまま、俺達三人のチンポに奉仕してチンポ汁搾ってくれよ」

「もし何かあって腰落としたら、シャインミラージュのマンコがそいつの顔に当たるってわけだ。そうになったらそいつはラッキーだな!! ハハハハ!!」

生徒達が起きるのも気にしない戦闘員達の品のない大き過ぎる笑い声。甘い吐息を漏らしながらも焦燥に駆られるシャインミラージュの眼前に突きつけられる三本の肉棒。

「……はあ……両手が、熱くて……ビクビクって……」

白いロンググローブに包まれた小さな手を広げ、左右から突き出される戦闘員チンポを優しく握る。

前に体験したのと変わりなく、掌に包まれた剛直は熱く脈動を繰り返していた。指に僅かに力を入れて細やかな刺激を与えながら、歪いびつな肉棒の形を確かめるように前後へと動かす。

「おお、いい感じだ。雌奴隷の才能があるぜ」

「俺のはまだ何もしてねえぞ!! 早くしろ!!」

「わ、わかってますわ……あむう、ちゅ……じゅぶるう、じゅじゅう!!」

両腕が塞がれている状態で真正面に存在する肉竿への奉仕は、先ほども犯された口を使うしか術はない。

止めるようにと目で訴えるも、ニヤニヤとした戦闘員が笑いながら見下ろしてきて、むしろ行為はエスカレートするばかり。

「早くしねえと起きちまうかもしれないぞ。これくらいで奉仕もできなくなっちまうのかあ？」

「んじゅぶ、じゅるるるるうう!!　じゅつぶ、じゅぶ、じゅずずずうう!!」

（こいつら……許しませんわ……絶対に、絶対に……わたくしは、負けたりなんてしませんから……んひいひい!!　乳首ダメへえ……!!）

心の中で戦闘員達への怒りを示しても、屈強な黒い脚に乳房が粘土細工のように押し潰され、同時に形が歪む敏感突起によって頭の中が白く染まる。

それでも、囚われの変幻装姫にできることは懸命に敵戦闘員へと奉仕することだけ。逃げる獲物を追うように瑞々しい唇を汚棒に擦りつけ、穢れた水音を奏で続ける。

「へへへ……いい吸いつきだ。変幻装姫様の口マンコで奉仕して貰えるだなんて幸せだぜ」
「こつちも手袋で必死に擦り上げてきやがる。もう武器なんて持つ必要はねえな」

「そうそう、チンポだけ握ってりゃいいってモンだ」

「んじゅつ!!　じゅりゅぶう!!　ぢゅぢゅりゅりゅ!!　じゅつぶぐつぶりゅるうう!!」

（悔しい……戦闘員に、こんなことを言われて……わたくしはチンポをしやぶって、扱しい



ているだけだなんてえ……)

強化戦闘員。ゲームにも負けてしまった結果だったとはいえ、単純な戦闘能力では圧倒的に勝っている。

変幻ヒロインからすれば今も格下として見ている相手に好き勝手に言われ、汚棒を奉仕させられている屈辱にわなわたと全身が震えた。

「本当ならすぐに握り潰すこともできるってのに、丁寧な奉仕してる気分はどうだよ?」
「オラッ!! こうしてデカ乳や乳首いじ弄られて気持ちいいんだろぅが!」

「んじゅっううう!! んぐぶう!! じゅりゅじゅう!! じゅじゅつ……じゅぽぽおお!!
おおつぶ、ぐぶりゅりゅうう!!」

(……む、胸え……!! お、オッパイも乳首も蹴られてええ……み、ミルクでるっ……ん
おおほおッ!!)

グイグイと勢いを増す乳房圧迫に対して、快感ミルクが溢れて全身が痺れる。時折勢よく膝が叩きつけられる被虐の乳悦に全身が熱く反応するのが止められない。

「そら出すぞ!! 口マンコヒロインにチンポ汁ぶちまけてやる!!」

「俺もだ!! このまま顔面にぶっかけてやるからな!!」

「下にいる奴にかかんねえように、全部お前の身体で受け止めるこった!!」

「おおつぽお!! じゅぽつぢゅぽお!! んむうぶ、ぐぶりゆりゅつ!!」

(せ、戦闘員のチンポが震えてえ……に、逃げてはダメですわ……わたくしが、全て浴びなければあ……く、うう……)

口腔内で、両手の中で、三本の肉棒が熱く震え射精を告げる。

本来であれば身を引いて少しでもかからないようにしたいところではあるが、下にいる生徒にかからない為にもと、自身を的としなければならぬ。

嫌なのにもよるで白濁液による汚辱を求めるようで恥ずかしいのに、それでも積極的に身を肉棒へと近づけた。

「そんなに欲しいのならくれてやるぜ!! 喰らいやがれシャインミラージュツ!!」

ぶびゅううううう!! びゅるるるるううう!! びゅびゅりゅりゅりゅりゅうう!!

「んぶうううううう!! んぐつごぎゅつ!! んんう、ごくごく……んぶううう!! じゅるるるうう……んぎゅううつ、ごぎゅうう!!」

(ああああ……熱くて、ドロドロしたのが口の中に、身体に……で、でもわたくしが受けなければ、下にいる方があ……はあ、んああ……)

三人同時の射精によって変幻装姫の喉の奥へ、そして左右からも白濁の汚辱液が叩きつけられる。

髪が、顔面が白い欲望で塗り潰され、濃い雄の臭いに頭がクラクラとしそうだ。

口の中から奥まで穢されるものの、吐き出すことは許されない。シャインミラージュは一滴残らずその身で受ける為に、頬を窄めて勢いよく吸引し、精液の残滓ざんしを求めて両手でも受け止める。

まだ始まったばかりだというのに、変幻装姫の身体は戦闘員の精液によってドロドロに穢されてしまっていた。

「じゃあ次は俺の番だ。しつかりしゃぶってくださいよ」

「は、はい……うう……わかりましたわ……」

疼く。何度も無理やりに貫かれてきたアナルが、怪人の太い雄の象徴に反応して疼いてしまう。

「あああ……そ、そんな大きなチンポで……あ……んひひひひひひひひひ!!」

その言葉は嫌がつているのか、それとも興奮からくるものなのか。変幻ヒロインが自覚する前に、怪人の剛直が直腸を一気に押し広げていった。

人間を軽く上回る、改造された存在だからこそ持てる巨大な肉槍。アナル処女を奪った怪人がニヤつきながら腰を一気に押し込み、排泄穴を変態的なチンポ穴へと変えていく。

「締まる締まる!! シャインミラージュのケツ穴は極上だなあ!!」

何度広げられても処女のように締めつける極上の穴。その持ち主が生意気な正義のヒロインであればやはり格別であり、ドルコスのピストンは最初から全開そのもの。

相手のことを一切考えない動物的な行為。本来ならば反感を覚えなければいけないというのに、調教された身体に衰弱した精神は、一匹の雌として屈服する悦びに満ちてしまう。

「あああああつ!! あひひつ……ああ、んっほおお!! 身体、押し潰されるうっ……んひっ……あああ、くひひひひひひひ!!」

（ふ、太いい!! 黒田達と、全く違いますわ……あああつ……よ、余計に、凄く感じてえ……おほおおおっ……身体、悦んでるううう……!!）

過去に激しい肛虐に晒されたものの、ドルコスに犯されてから大分時間が経っている。デブロも同等レベルではあったが、戦闘員から黒田達へとサイズが小さくなっていった事実。

敏感な雌穴と化したアナルは、常人の肉棒に貫かれても十分に締めつけて快楽を得ることができ、アクメを迎えられないということはなかった。

だが改めて、直腸を圧迫する筋肉怪人の巨根は凄まじく、つい先ほどまで押し込まれていたモノが玩具のように感じられる。

声を抑えることなど一瞬たりともできない快感は、ドルコスが変幻ヒロインのアナルで感じてるように、極上のもの。

「いつもの生意気な言葉はどうしたあ!? 負けを認めても、完全に屈服したわけじゃあねえんだろう!!」

恥辱の体勢で犯されながらも、快楽に染まったアへ顔を見せる無様な変身ヒロインに、ドルコスは勝利者の余裕に満ちた笑みを浮かべながら追い立てる。

シャインミラージュの敗北宣言はこの戦闘でのものであり、完全にダーククライムに屈服したわけではないのはドルコスにも理解できていた。

弱った心へと更なる追い討ちをかけようと、身体に巨大な悦楽を刻みつけながら、言葉

でも執拗に責め立てていく。

「あああ、あんう、あああつああん!! け、ケツ穴、凄過ぎてへええ……はああおおつ……ま、負け、なひいいいい!!」

悪に屈してはいけなさと、正義の心が呼びかけるが、ドルコスが腰を一突きするだけで頭の中がピンクの快楽一色に染まる。

今のシャインミラージュの尻穴は最低にして最大の弱点。一度折れた心を戻そうとしても、常人を遥かに上回る雄肉槍に突かれれば容易く折られてしまう。

「な、中で、チンポ暴れて……ますのおおつ……!! おほおおつ……擦れて、響くううッ……んひいつ、あひやあうう!!」

まるで杭打ち機のような速度と強さ。排泄穴の中で暴れ回る規格外の巨根は、直腸を押し広げ、奥の奥まで犯し尽くすかのようだ。

体内に響く怪人の極太チンポの激感に声は大きくなる一方で、普段の凛々しさを失った、快楽に蕩けた情けない表情は淫乱・変態と罵られても仕方のないもの。

「正義のヒロインが、敵のチンポに喘がされて恥ずかしくねえのかあ!？」

「あああ、くひいいんッ!! ぜ、全部……あなた達のせい、でしょうう……あんう、おつぽおおお!!」

こんなに敏感で変態的な身体になってしまったのは、全てダーククライムの手によるもの。初めての敗北から続く調教は、回数こそまだ多くはないものの、その濃さは圧倒的。

しかも狙われるのは不浄の排泄穴ばかりともなれば、正義のヒロインの前に一人の人間である少女の身体が変わってしまうのは当然とも言える。

本当ならドルコスの言葉の全てを否定するべきなのだろうが、暴力の嵐に折られ、今も快楽によって溶けていく精神では不可能だった。

できることと言えば事実を突きつけることだけであり、それはアナル快感を認めることに他ならない。

ズウンッ!! と、一際激しく突き入れられた肉凶器による衝撃に、軽い絶頂を迎えさせられた変幻ヒロインは、僅かに噴出した淫液によってその美貌を穢す。

「ちげえだろ。お前は元々変態だったんだよ。じゃなけりゃケツマンコでここまでアへらねえ!! このケツ穴ヒロインが!!」

「ひゃひいい!! へ、変態だなんてえ……んおおっ!! あああっ、んひいいいい!! ケツマンコ、捲れるううッ……ほ、本当に、ケツ穴ヒロインになってしまいますのほおおッ!!」

汗ばんだムッチリヒップへと叩きつけられる分厚い掌。身体全体を駆ける鋭い痛みは同

時に被虐的な快感となつて、シャインミラージュの口から間拔けな悲鳴を響かせた。

極太肉棒によって送りつけられる肛虐刺激は、初期に覚えた嫌悪感は今はなく、むしろ太ければ太いほどに、乱暴に掻き回されれば掻き回されるだけ快楽が刻まれていく。

これを変態と言わずして何というのか。ドルコスの罵声もアクセントとして興奮を加速させるマゾヒロインは、最低な敗北快感に酔い痴れていく。

「前回の分も含めて、徹底的にケツマンコ犯してやるからなあ。そら、早速一発目だけえ!!」

調教を繰り返されるにつれて敏感になつていく身体。自分ではもう制御できず、簡単に快楽に飲み込まれてしまう今、ドルコスの言葉は死刑宣告に等しい。

また狂わされる。散々犯されてきた尻穴が肉穴へと作り替えられてしまう恐怖。しかし、それを期待するように燃え上がるマゾヒスティックな本能。

「んっひいひいひい!! お、オッパイも一緒にダメへえええええッ!! ち、チンポ汁とミルクでいつくううううッ!!」

ドルコスが腰を深く押し込み、激しく肉棒が脈動し射精を感じさせた瞬間。両の腕が迫るのが見え、ふるふると震える汗と母乳で鈍く光る乳房に走る衝撃に、脳内がスパークした。

びゅるるるううううう!! ぽびゅるるうう、ぶびゅる!!

直腸に注がれる濃厚にして灼熱の白濁。黒田達のととは違う、人外の反則的な勢いと熱さ。まるで弾丸のように注がれる精液に、一瞬で快楽は頂点に達してしまふ。

更に、力一杯握られた乳房から噴出する母乳もまた、怪力によつて生み出される搾乳快感も合わさつて、被虐的な興奮を高まらせた。

（く、黒田のと全然違ううう!! こ、これ、凄過ぎますのおお!! 気持ちいい……ザーメンとオッパイミルク、気持ちよ過ぎますわああ!! おほおほおほお!!）

過去に味わつた二箇所を同時に責められるという激感。状況と体勢は違うものの、ドルコスがすればこうも変わるものなのか。

脳内を埋め尽くす圧倒的な快感を前に飲み込まれたヒロインの心。ただただ刻み込まれる快楽に染め上げられ、盛大に淫液を噴出して自らの顔を汚していく。

頭の中が真っ白に染め上げられ、無様なアへ顔を晒す変身ヒロインの身体は完全に脱力し、何一つ抑えることができない状態。

ピクピクと震えるシャインミラージュの身体。その股間から、じよろろろおつと音を立ててアンモニア臭のする黄金水が噴出した。

「グハハハ!! こいつ小便漏らしてやがる!! 本当に無様だなあシャインミラージュ!!

お前はもう正義のヒロインなんかじゃなく、肉便器になるのがお似合いなんじゃねえのかあ!？」

普段の凛々しい表情と正反対の八の字に下がった眉。だらしなく開いた口から舌を垂らした最低な表情を穢す、自らの汚液。

涙と鼻水、母乳と潮と小水で染め上げられた顔には、べつたりとマジカルフォームの桃色の髪が張りついていた。

「に、肉便器い……おしっこ、漏らして……わたくしの顔お……臭い……」

恥辱のポーズで犯され、自慢の美貌を汚される屈辱。鼻での呼吸の際に頭が痺れてしまいそうな汚臭に、しかし身体を駆ける興奮は加速するばかり。

穢されても蕩けた表情は変わらず、呟く言葉はドルコスに届かずに宙に消えていく。

「さて、便器ヒロインをこのまま犯しちみたいところだが、それじゃあ前と同じだな」
勿論怪人の陵辱がこのまま終わるわけがない。ドルコスはアへ顔ヒロインの身体を、うつ伏せになるように横に回転させ抱え上げた。

普段感じるのとは全く違う直腸の擦れ方に「んっひい!!」と、悦びの嬌声を響かせるシャインミラージュ。

過去に犯された時と同様のM時開脚は、途中に存在する下着のせいで開ききれず中途半

端な状態。だが基本的に前回と変わらない現状では、ドルコスは満足しないだろう。

何を考えているのかという不安に駆られながらも、されるがままの敗北ヒロインには手の打ちようがない。

「このまま公園を出て、人間共の前で犯してやるよ」

よく聞こえるようにと耳元で囁かれる言葉に、変幻ヒロインの背筋が凍った。今までの快楽に染まった脳内が無理やりに覚醒し、一気に恐怖に染め上げられていく。

「い、いやあ!! それだけは、人前でなんてえ……んひいう、ああんう!!」

まだ時間は夜になって浅い。大通りへと行けば人々の往来は多く、嫌でも衆目に晒されることとなる。

正義のヒロインの存在を知っている者達からすれば、マジカルフォームのコスチュームと桃色の髪を見るだけでシャインミラージュだと認識するのは難しいことではない。

そうなれば変身ヒロインは敗北と共に、アナルを犯されて喘ぐ変態の烙印を押されかねない。

痛みを訴えて徹底的に抵抗できれば多少は違うのかもしれないが、ドルコスの巨大チンポ相手に耐えることは不可能だと、身も心も完全に刻み込まれていた。

「うるせえ!! てめえは俺様に負けたんだ。拒否権も決定権もねえ。ま、俺様は優しいか

らな、顔くらいは隠しといてやるよ」

尻穴快感に勝てないヒロインの懇願も空しく、ドルコスは公園の外へと出るべく足を踏み出した。たった一步進んだだけで生じる振動が、身体を揺さぶり直腸内を擦り上げて肛虐の悦びを断続的に与えてくる。

身体全体を駆け巡る甘い痺れに脱力する変身ヒロインの、淫液に染まった下着が乱暴に掴まれ、ズルズルと太ももからつま先へと抜けていった。

「ひッ!? な、何をつ……いやああ!! パンツ……被せてはあ……お、おやめなさい……おお、ほおおん!! ひやあああつ……んうう!!」

濃く変色した桃色の下着が大きく広げられ、頭上から下りてくるのを理解した変幻ヒロインは陵辱者の狙いに気づき声を荒らげた。

桃色のグローブに包まれた華奢な手が阻止しようと頭部を守ろうとするが、四本の腕を持つドルコスには無意味な行動。

万歳状態で腕を固定され、唯一動く顔を振り逃れようとした。しかしドルコスによって腰を強く突き上げられ、脳天に響く快感刺激に動きは止まり、無防備なままグショグショに濡れた下着を頭から被せられてしまう。

（こ、こんなことお……自分のパンツを、頭から被せられるだなんてえ……あああ、わたし

くしの汁の臭いがああ……はあうう、汚されてしまつてえ……)

単純に頭に被せられただけでなく、顔面に押しつけられるような状態。脚を通す両穴が視界を確保するものの、汚れた股間部が一直線に鼻と口を覆い異臭を直接送り込んでくる。ポニーテール部分が僅かに膨らんである種のアクセントにも見え、ヒロインの顔の全ても怪人の玩具にされてしまつている現実がそこにあった。

乳房を露出し、汚液に塗れた顔を淫汁に濡れた下着で覆うその姿は正に変態。だがどうしてだろうか、最低な姿で穢されているというのに、身体全体を強い興奮が満たしていく。(こんな姿見られたら、わたくし……わたくし、どうなつてしまふんですの……? だ、ダメですわ……んはあぁっ……早く、どうか、しませんとお……)

隙を見てドルコスに攻撃をすることしか逃れる術はない。だがこうしてアナルを犯され力の入らない今、実際に行動できたとしても成功する可能性は限りなく低いだろう。

自然と思考は正体を知らない方向へとシフトし、その為にできる行動は一つだけ。フオームチェンジの応用で、自らの服装や髪の色、髪型を変えらるというもの。

ドルコスが喋らない限りは、正義のヒロイン・シャインミラージュの敗北と痴態は誰にもバレず、顔を犯す汚布も消えてくれる。

今も突き上げられる直腸からの刺激にくぐもつた甘い声を漏らしながら、必死に身に纏

うコスチュームを変えようと意識を集中させていく。

「う、嘘……わたくし、まだ何も……!!」

だが実行するよりも先に起こる変化。マジカルフォームは霧散し、新たに身体を覆うのは戦闘用とは全く関係のない、身体のラインを存分に際立たせる赤のバニーガールコスチューム。バニーフォームとでもいいえはいいのだろうか。

髪の毛は目立つ桃色のポニーテールから月明かりにも光る銀色のロングに変わり、尻尾の部分は存在せずにまるで肉棒を刺す為のように穴が空いており、そこをドルコスの肉凶器が通っていた。

乳房は谷間を見せつけ、通常よりもやや丈が短いのか乳首に引つかかるような形でギリギリ見えない扇情的な形状。肉づきのよい美脚を覆うパンストも、雄の欲望を刺激する材料の一つ。

頭には白いウサギの耳がつけられ、本来ならば消えているはずの下着だけが丁寧に残っており、今も汚臭を撒き散らしながら、強い恥辱感を刻みつけてくる。

「どうだ、これなら人間共にはバレねえだろう？ 優しい俺様に感謝することだなあ……パンツはサービスとして残してある。グハハハハ!!」

（これ、ドルコスの仕業ですの……？ そんな……コスチュームや髪まで……そこまで、

闇のエネルギーが身体を……!?)

過去にデブロによってコスチュームを変化させられたことがあったことを思い出すも、それはほんの一部。今回のように全てが変えられてはいなかった。

身体を侵す闇のエネルギーによって蝕まれ、心身共に弱りきった今の状態ではコスチュームまでもが敵の自由。今のお前は無力な一匹の雌なのだと教えられてしまったようで、大きな絶望がシャインミラージュを墮としていく。

「ここから少しでも変化があれば、俺様は口を滑らせちゃうかもしれないねえから気をつけろよお? 知られたくねえんだろ、変身ヒロイン様よお」

エネルギーはまだ残っており、恥辱のバニーフォームから早く変えなければと焦る最中に行われる忠告。もしも無視しようものならば、ドルコスは容赦なくバニーガール少女が正義のヒロインだと声を大にして知らしめるだろう。

最早シャインミラージュには、黙って人前で犯される以外に選択肢はない。悪の怪人に敗北した正義のヒロインに与えられる罰として当然ともいえる流れに、バニーヒロインは身体を震わせるだけ。

「さあ行くぜ。目指すは前に暴れた場所だなあ!!」

「お、お待ちなさいっ……本当に、んひひひひひ!! ゆ、揺らさないで……あひひっ……」

…おお、ほおおお!! もっと、ゆつくりいい……!!」

先ほどまでのようにゆつくりとではない。目的地が決まったことでドルコスの移動速度は速まり、既に公園の出入り口から出てしまった。

その際にわざとらしく身体を上下させており、直腸内を埋め尽くす怪人の巨大な肉凶器が、遠慮なく暴れ回る。

万歳状態だった両腕は後頭部で組むようにされ、ドルコスの手によってガッチリと掴まれたまま自由を得られず、今にも零れ落ちそうなほどに弾む爆乳を押さえることもできない。

「何言ってやがる。お前は乱暴にされるのが好きな変態じゃねえか。それに言っただろう？ お前に決定権はねえってなあ。嫌ならもっと揺らしてやるよ!! オラオラ!!」

弱味を見せればつけ込まれる。それはダーククライムと戦ってきた変身ヒロインにとって当然備わっている知識。

弱々しい懇願も相手を調子づかせるだけなのだど理解していても、こうも弱点を責め立てられた状況に、我慢できずについ言葉にしまった。

人前で犯されるのであれば、せめて少しでも声を上げないように、正体がバレる要素を排除しなければならないというのに、逆にドルコスの嗜虐心を過熱させる結果となつてし

まう。

「おっほおお!! け、ケツ穴があ……搔き回されてええ……!! おひいいいっ……はひいう、奥まで、ズウンつてくるう!!」

既に誰かに聞かれてもおかしくない位置を進んでいる。抱え上げられた身体が乱暴に揺さぶられ、敏感な腸壁を巨大な肉棒が執拗に刺激が送られ、一秒たりとも我慢できない巨大な快感に変態ヒロインは淫らに悶えた。

(ち、近づいてるう……もうすぐ、こうして犯されている姿が……見られてえ……ああ……身体、燃えてしましますわあ……恥ずかしいのに、されたくないのに……熱くなつてしまっていますのおお……!!)

バニースーツの股間部の赤を更に濃く変色させる快楽の証の淫蜜。もうすぐ大通りに辿り着く不安に心臓を高鳴らせながらも、同時に身を焦がすは変態的な興奮。

汚れきったパンツをマスク状にして被り、扇情的なバニースーツに身を包みながら、巨大な肉槍でアナルを貫かれ喘ぐ姿。

これを見て何人が同情してくれるだろうか。異性からは欲情され、同性からは軽蔑の視線や言葉を向けられるかもしれない。

そう想像しただけでゾクゾクとしたマゾヒスティックな興奮が燃え上がり、変身ヒロイ

ンを一匹の雌へと変えていく。

「近づくにつれて締めつけが凄くなりやがるぜ。期待してるんじゃないのかあ!!」

変幻装姫の心の変化に身体も反応を示し、狭い道から出る度に怪人の肉棒を強く締めつけていた。今までの調教の成果とこの反応から、ドルコスが想像するのは難しくはなく、嫌がらせのように腰を突き上げた。

「くひいいうっ……ち、違いますわ……誰が、そんな……ああ……み、見ない、でえ……!!」

悪ふざけの突き上げだけで脳天にまで響く快感刺激に、喘ぎながらも否定する途中。「ひっ!!」という悲鳴が聞こえ視線を前に戻すと、そこには帰宅途中のサラリーマンの姿。

異形の怪人であるドルコスの姿に恐怖を覚え、道の端に逃げるように後ずさるも、その視線はM時開脚で犯されるバニーガールへと移っていた。

たった一人の異性に見られた痴態。見ないでと言葉にするも、心臓の高鳴りは今までの比ではなく、分泌される愛液の量も増していく。

ドルコスはたった一人に興味はないと、笑みを浮かべながらも無視するように前進を続ける。だがしっかりと、見られたとわかった瞬間に、緊張と興奮に強まった変幻ヒロインの尻穴の強烈な締めまりを感じ取っていた。

その後も三人ほどに見られる度に感じた強い刺激に荒い呼吸を繰り返しながらも、快楽と絶望に染まっていた思考に浮かぶ一つの想い。

「お、お願い、ですわ……んつくう、はああ……おほおつ!! だ、誰も、傷つけたりは……あひいいい……し、しない、でえ……」

正義のヒロインとして、忘れてはいけなかったこと。今まで遭遇した人々は、下手をすれば殺されていてもおかしくはなかった。

ドルコスの心持ち一つで、もうじき到着する大通りの人々の命は容易く奪われてしまう現実。今のヒロインに誰かを守る力はなく、ただただ怪人に懇願することしかできない。

「ちっ……負けを認めた癖に殺されたくないだの、人間共には何もするなだの……調子いいんじゃないかねえのかあ!!」

「……ご、ごめんなさい……でも、お願い、ですわあ……」

敗北を認め許しを求めたヒロインとして都合のいい願いだとはわかっているが、それとも言わずにはいられなかった。

機嫌を損ねたであろうドルコスの荒い言葉に、震えた声で懇願する変幻装姫。かつて無敵を誇った正義のヒロインとは思えない弱々しさだった。

「まあ仕方ねえ、別に暴れに来たわけでもねえしな」

思った以上にあっさりと受け入れたドルコス。どこまで信用できるかはわからないが、それでも断られるよりはマシだ。

「ありが……」感謝を伝えようと口を開きかけた変幻ヒロインの言葉を遮るように、怪人の言葉が続く。

「その代わりによ。お前は俺様のチンポで悦ぶ変態になつて貰うぜえ？」

その言葉の意味を理解するよりも先に聞こえた悲鳴。多くの人間の声が重なったそれは、もう大通りの前まで来た証明だった。

常人を超えた体躯たいくを持つ怪人の姿。それは今までに何度も現れては平和を脅かした、ダーククライムの一員であると人々は十分に理解していた。

だからこそ、反射的に恐怖が本能を支配し、最大のポリウムで悲鳴を上げて逃げ出すのは当然の出来事。

人から人へ、ドルコスの存在は悲鳴という伝達方法で知れ渡り、怪人が大通りに姿を現す前に街は混乱の渦へと飲み込まれていく。

「あはあうつ……へ、変態、ですって？ おほおお、ん、おおおおつ……ど、どういうう……こと、ですのお……んひいいう!!」

チンポの太さに広がった尻穴。パンパンに詰まった直腸がイボイボで擦れ、甘過ぎる被

虐快感が体内を埋め尽くす。

守るべき一般人の悲鳴を聞いても何もできない無力感に苛まれながらも、敗北の令嬢ヒロインにできる唯一の行動は、怪力怪人の言葉に従うこと。

アナルを犯されることへの耐性は既に皆無に等しく、巨大な肉槍に貫かれることに至高の喜びを見出す敏感な身体は、少し小突かれる度に変態的な嬌声を漏らさせる。

「なあに簡単なことだ。ケツマンコ犯されてどんな風に気持ちいいかってことを、隠さずにアへりゃいい」

今現在も我慢できずに蕩け声を響かせてしまっている状態。悔しいがこの激感に耐えることは不可能であり、ドルコスが強く腰を突き上げれば簡単に望み通りの展開となるだろう。

汚辱液に濡れたパンツを被ったバニースーツの少女など、変態以外にどう表現すればいいのか。だからこそ、軽い足取りの筋肉怪人の言葉が理解できなかった。

「チンポ大好きな淫乱変態のフリをすりゃいいんだ。演技だよ、え・ん・ぎ」

（わ、わたくしに自分から、ドルコスのチンポを求めろというんですの……そ、それも人前で……でも、しなければ皆の命が……んんうっ……）

求められるのは快樂に堕ちた変態少女となること。多くの人々の視線が集まる中で肉棒

快感を認め、自ら求めるという最低なシナリオ。

それを知っても何一つ言い返すことも反抗することもできないヒロインは、ただただ悔しさに表情を曇らせるだけ。

「わかり、ましたわ……!!」

敗北を認め快楽に支配されるバニースーツの少女からの言葉に、ドルコスは下卑た笑みを浮かべた。

「人間共お!! こっちに集まりやがれえ!! 今日俺様の雌を見せに来ただけだからなあ!!」

大通り全体に響き渡るかのようなドルコスの叫びに、人々は魔法でもかけられたかのように動きを止める。

普段ならば口よりも先に手を出し、街の建造物を破壊していた怪人の予想外の言葉。だが怪人の気質を知っているからこそ、それに反したらどうなるかは簡単に想像できるのだ。(……この、馬鹿みたいな大声を出して……わたくしがいること、忘れているんですの……!!?)

背後から放たれた大音量の叫びに、咄嗟に耳を塞いでいた変幻装姫。ビリビリと身体を震わせ、快楽に染まっていた思考をクリアにするほどの衝撃に、僅かに残る反抗心が強く

反応する。

耳に当てていた手を放すと、ドルコスの変わりように逃げることを止めた人々の言葉が聞こえ始めた。破壊活動をしていないという言葉を感じて、彼らの注目は、必然的に『雌』と呼ばれた少女へと集まることとなる。

「おい、あれ……バニーガール?」

「パンツ被ってやがる。しかも湿ってるんじゃないか?」

「怪人に狙われたのか……可哀想に」

「やだ、お尻の穴に刺さってるの……もしかして」

銀色の髪のパンツマスクバニーガールに集まる視線・視線・視線。その殆どが少女の姿の異質振りに驚きで満ちたもの。

発せられる言葉は変態的な衣装への感想や、見え隠れするドルコスの巨大な肉棒への恐怖。ドルコスに雌として扱われる同情。

「人間共に見られてチンポ締めつけてねえで、俺様のチンポ便器として、しっかりと挨拶してやれ」

正体がバレてしまわないかという不安と、多くの視線に晒されるゾクゾクとした刺激。桃色のパンツの下頬を、被虐的な興奮に紅潮させる敗北ヒロインへの命令にドクンと心

臓が高鳴った。

「おっほおおお!! わ、わたくしは、ドルコス様のお……んっひいああ、あひいいうんッ!! ち、チンポ便器なのほお!!」

（ああ……わたくしのこんな変態的な姿、見られてえ……おっほおおお……頭、痺れるう!!）

強引に腰を突き上げられ、頭の中を快感電流が駆け巡る。排泄穴の入り口から、ドルコスが届くギリギリまでが歪な形の肉棒によって勢いよく擦られ、強過ぎる幸福感が脳内を占めていくのだ。

気丈な態度で必死に抵抗するべきだが、今はそれをさせても貰えない。憎き敵を『様』を付けて呼び、自らを人間以下の便器として認める行為。

口を開いた際に再び開始されたピストンによって、余りにもみつともないアへ声を響かせながらの言葉。身体を侵す多大な快楽を否定せず、反応して喘ぐだけの何一つ我慢しない状況は、令嬢ヒロインに予想外の解放感を与えた。

「おい、あの女あんなデケエので犯されて喘いでるのかよ」

「自分からあんなこと言つて、完全に変態じゃない……」

「よく見てみればオッパイ凄いな。今にも乳首出そうなくらいに揺れてやがる」

「すっかり調教されちゃったってことか……早く来てくれ、シャインミラージュ」

（ば、バレてはいませんか……あはあ、おっほおっ……!! でも、変態扱いされてえ……ああ、ごめんなさい……シャインミラージュは、来れませんかのお……あ、あへええつ）

同情の言葉は、たった一度の変態挨拶だけで一気に侮蔑や劣情を含んだものへと変わっていく。一瞬で変態の烙印を押された絶望の中にある唯一の救いは、誰もが今犯されている少女を正義のヒロインだと想像していないということ。

正体を知るのはアナルを犯す怪人と、犯されている常人だけ。人々の希望である無敵のヒロインは、敵対する怪人に直腸を攪拌かくはんされて喘ぐ変態バニー姿で既に注目の的。

強い無力感と屈辱が心を押し潰すように肥大化するが、それらを軽く上回る巨大なマゾ快感が身体も心も埋め尽くす。

普段怪人や戦闘員達と戦う際にも、自らに集まる人々からの視線に高揚感を覚えていたが、今向けられているそれは過去の比ではない。

かつて感じたことのない興奮が身体を激しく昂らせ、突き刺さる負の感情の入り混じった視線が、強い刺激となつて変身ヒロインの身体を攻撃する。

「あひゃああう!! あんう、やはああ!! へ、変態バニーが……ケツマンコに、極太チン

ポで……おおお、ほおおッ!! ずこずこされるところお……たくさん見てえええ!!」

集まる視線に呼応するように、パンツヒロインの蕩けた声も甘く大きくなっていく。呼吸が荒くなればなるほどに、張りついた下着から発せられる異臭が鼻を刺激した。吐き気すら覚える悪臭だというのに、何故か身体は敏感に悦びを見出していて、呼吸の度にゾクゾクとした桃色の快感に染まる。

ぐじゅぶ!! ぶじゅじゅう!!

大量射精後の濃厚な精液は今も直腸に溜まっており、ドルコスのピストンに合わせて汚らしい音を立てながら潤滑油として肉凶器を滑らせた。

ズウン! と、強引に肉チンポを捻じ込むかのような鋭い突き上げに、身体中を快感刺激が駆け巡り、ドルコスの望みであろう引き千切らんばかりの締めつけで返す。

勢いだけの力任せのピストンは、バニーフォームのヒロインを玩具のように乱暴に上下させ、男達の目を釘づけにするほどに弾むGカップの爆乳。

「お前がどれだけ変態なのか、もつと教えてやらねえとなあ!! そら、サービスしてやろうぜえ!!」

「んひひひひひひひひひ!! ち、乳首から、ミルク出てしまいますのおお!! あへえええッ……ギユウつてされて、潰されるとお……びゆるびゆる出てへえ、い、いつくう

ううううん!!」

身体を揺さぶる腕とは別に生えている残りの二本が、たふたふと弾む乳果実を捉え、怪力に任せて形がひしゃげるまでに握り潰された。

卑猥なバニースーツから勃起乳首は簡単に姿を現し、あらぬ方向へと母乳が噴出した。途端に一瞬で限界にまで上り詰める快楽に軽い絶頂を迎えるバニーヒロイン。

敏感な乳房全体から感じる甘美な刺激に脳内を白く染め上げられる幸福感に包まれるものの、それはまだ行為の途中。

潰していた手から力が抜け、元の巨大な乳肉へと震えながら戻ったところで、白く濡れた淫乱突起へと指が伸びた。

ドルコスの太い指が両乳首を摘み、先の乳房同様に強い力で押し潰す。押し返す力も意味を為さず、一瞬で潰された敏感な器官から激しい快感電流が駆けた。

乳房を潰された時以上の最大級の刺激に、同調して噴出する改造母乳。呆然とする人々へと目掛けて、射精したかのような勢いで乳白色の液体が降り注いだ。

布地に隠された口は嬌声に大きく開き、だらしなく出ようとする舌が押し上げる。バニースーツの股間部は、今の衝撃で噴出した潮で更に濃く変色していた。

「お、おい……今母乳出したぞ」

「孕まされてるっていうのか。それとも改造されて……」

「どっちにしてもあんなに喜ぶなんて、最低よ」

「わ、わらくひ……最低、ですのお……おっほおおお!!　ち、チンポお!!　ドルコス……様の、怪人チンポれえ……ケツマンコ捲れるううう!!　あひやあうっ……また、ミルク出てしまいますのほおお!!」

侮蔑の言葉に心が痛むのは、まだ心が完全に折れきっていない証拠。しかし、同時に感じるゾクゾクとした被虐的な興奮も確かに感じる。

朦朧とする意識の中で自我共に認める最低という単語。掻き乱される変幻ヒロインの心を身体ごと滅茶苦茶にしようと、怪人は更にピストンを加速させた。

パンパンと肉と肉のぶつかり合う乾いた音を響かせながら、念入りに乳首を押し転がし、バニーミルクを絶え間なく溢れ出させる。

段々と呂律が回らなくなりながら、怪人の命令を忘れることなく——僅かに『様』付けを遅らせながらも——淫乱極まりない言葉の数々を口にするヒロイン。

「さあお前の大好きなチンポ汁だ。たっぷり注いでやるから喜べよケツ穴便器い!!」

（も、もう射精すんですのお……今イッたばかりで、身体、敏感ですのにいい……ああ、でも、でもお……ケツマンコ疼いて……おかしく、なっていますわあ……）



デブロのよからぬ企みを確信しながらも、屈服していない証明として、抗議の視線を向ける。しかし、屋外雌豚散歩の禁断の悦感に支配されていく中では、その瞳に普段の力強さはなかった。

「いやいや、折角の外での散歩じゃかな。小便でもさせようと思ってのう」

「……こ、こんな場所でおしっこを……？ そんな、すぐになんて……出せるわけがありませんわ……」

さも当然という口調で放たれる言葉に、反応するシャインミラージュの声が震える。

いくら一般人の目には映らなくとも、完全に意識から外すことは不可能だ。そんな状態で、敵の下卑た視線に晒されながらの放尿だなんて。

いかに拒否しようとも怪人の命令は絶対。それはわかっているが、生理現象は操れないと主張する。そう、普通なら……。

不安の表情で見上げるシャインミラージュが捉えたのは、何もかもを知り尽くしたというような、デブロの悪意に満ちた顔。ゾクつと背筋が冷たくなるのを感じながら、何かを言いたげに口を開くが言葉は出てこなかった。

「安心せい。出ないのであれば出るようにするまでじゃ」

どこから取り出したのか、地面へと置かれたステッキの代わりにデブロが持っていたの

は、透明な哺乳瓶。その中にはしっかりと、形状からの想像通りの白い液体が入っており、わざとらしい振動に合わせて波打っている。勿論、先端には柔らかな乳首もついていた。「コレには特別な薬が入っておつてな。飲めばたちまち激しい尿意に襲われるというわけじゃ」

丁寧とも取れる説明は、これから起こる人間以下の行為を教える為。しかし、今の流れで変幻装姫もそれは簡単に想像できている。だからこそ、赤く染まった美貌を苦々しく歪め、力なくうな垂れてしまう。

衆目に晒される恐怖はないとはいえ、それでも屋外放尿の異常さは消えない。更にその為には、目の前の哺乳瓶をしゃぶらなければならないのだ。豚鼻のまま、赤ん坊のように。「ほれ、さっさと吸いつかんか。でないと鎖を離してしまうかもしれないなあ」

僅かな逡巡すらも許されず、ネットリとした嫌味ったらしい残酷な宣言と同時に、その手から鎖が離れるのが見えた。

「あぁっ……はむうっ!! んちゅ、ちゅぷっ……」

(……い、いきなり鎖を離すだなんて……口を離してしまえば、姿が見えてしまいますわ……)

この姿が見えてしまう恐怖に駆られた変幻装姫は、慌てて偽者の乳首をしゃぶる為に顔

を突き出した。本来なら両手でデブロの身体や瓶の部分を支えたかったのだが、首輪の効果で両腕の自由を奪われてしまったようで、それはできなかった。

「ブヒヒヒッ!! 鼻の穴がよく見えるわい。ほれほれ、さつさと飲まんか雌豚め」

「んんぶっ……ひぎっ……!! ひ、ひやへ、へええ……」

四つん這いで、豚鼻を晒しながら見上げる先は憎き豚怪人。せめて相手の顔は見ないようにと視線を下げようとしたところで、デブロの指が拡張する鼻の穴へと引つ搔けられ、強制的に顔を上げさせられた。鼻フックに加えての、怪人の力での圧迫に、更に醜く潰れてしまったと錯覚してしまう。

「ちゃんとわしを見るんじゃ。言われんとわからんのか、本当に愚かな豚じゃな」

（……く、うう……こ、こんな姿で、デブロを見ながら吸わなくてはならないだなんて……それに、これ全然……全力で吸いませんとお）

グリグリと暴れる指が汚臭だけを残して離れると、シャインミラージュは目尻を下げた疲弊した表情で、咥えるゴム部分を必死に吸い始めた。

ちよつと吸っただけでは一滴たりとも出てこないのは、明らかに異常。シャインミラージュは頬を窄めるほどの強さで、内部に溜まる白液を吸い上げる。

（……んっ、この味……これ、まさかザーメンですの……?）

豚鼻ひよつと顔という無様な吸引姿を晒すことで、ようやくともに飲むことができた。舌を刺す苦味と喉を通るドロつとした感覚は、幾度となく味わわされた汚辱液に酷似している。

まさかこんな時でもと、デブロに対しての怒りが増すばかりだが、今は目の前のことに集中しなければ。哺乳瓶を持つ手が離れれば、シャインミラージュの姿はたちまち人々の目に触れることとなる。

顔を真っ赤にして未知の液体を吸い、下品に広がった鼻の穴をヒクヒクと震わせる。ジュズブツと必死な吸引音の後に、フーフーと周囲に聞こえんばかりの荒い鼻息が響き、何度もそれを繰り返した。

途中、哺乳瓶のへこみがギリギリにまで到達し、一度口を離さないといけなくなった。ゆつくりと口を開くも、一瞬たりとも離れまいと側部へとスライドしていく。

完全にゴム部分から口が離れた瞬間にギュポンッ!! と間拔けな音が鳴った。自分の口から出たわけではないが、堪らなく恥ずかしい瞬間であるのに変わりはない。チンポ奉仕を思わせる横しゃぶり状態のまま、変幻ヒロインは目を細めた。

「サービス精神旺盛じゃのう。じゃがまだ中身は残っておるぞ。小便する為に飲まんか」
「わ、わふあつへはふわ……ふうう……んんんうちゅ、じゅうつずじゅ!!」

執拗なまでの下品な言葉責めに急かされ、透明な瓶の外側へと押しつけていた唇を再び戻す。シャインミラージュが必死に擦りつけていた証拠として、艶かしい唾液の跡が残っていた。

「ようやく空になったようじゃな。飲み終える前に効果が現れるのではないかと思ったわい」

中身が完全に空になったのを確認し、ニタニタと笑う豚怪人。すぐにでもこんな屈辱の元を吐き出してしまいたい、まだ鎖に手を戻してはいない為に、変幻ヒロインは今も吸いついたまま。

「んんっ!? ふうつんう、んんんううっ!!」

デブロが哺乳瓶を持つ手を引くと、慌てて吸引を強める。身体の自由を奪われた状態でデブロとの繋がりを断たれば、逃げ隠れすることもままならない。

正義の変身ヒロインとしての矜持を、人としての尊厳を守る為に、気品ある美貌を真っ赤に染めて頬を窄める姿は、雄の嗜虐心をくすぐる無様なもの。

「おおスマンスマン。鎖を忘れておったわ」

本当に忘れていたのかわざとなのか。それを確認する術はないが、デブロが地面の鎖を手にしたのを目にした瞬間、シャインミラージュは大きく口を開いた。

この短時間で何度鳴ったかわからない卑猥な音を響かせながら、勢いよく顔を引く。その反動で纏わりつく唾液が宙を舞った。

「はあ、あはあっ……!! で、デブロ……あなた、どこまでも勝手な……あんう……!!」

同時に身体の自由が戻り、地面に両手をつき肩を、背を震わせる。新鮮な酸素を大量に取り込む荒い呼吸を繰り返し息を整えると、顔を上げて憎き豚怪人へと剥き出しの怒りを向けた。

だが、直後に現れた身体の変化により、怒りの炎はたちまち鎮火させられてしまう。下腹部が、いやもつと言うなれば、膀胱が驚掴みにされたかのような強烈な刺激。それは紛れもない確かな尿意として変幻令嬢を襲った。

（こ、こないきなりだ……なんてえ……の、飲んだ量以上が、暴れているみたいですから……）

恥辱の家畜ポーズを続けるシャインミラージュは、急激な尿意に耐えようと太ももを前後に擦り合わせ、淫らに腰をくねらせる。

グッと口を閉じ歯を噛み締め意識を集中させなければ、すぐにでも決壊してしまいそうなほどに、今まで経験したことのない強烈な尿意が暴れ回る。

「即効性ではないが、効果が出れば早いからのう。もうしたくてしたくて堪らんのだじやろ

う？ 遠慮せずにするといい。ブヒヒヒッ」

哺乳瓶の中の液体を飲み終えるまで調整していたというのだろうか。正義のヒロインを辱めるのに余念のない悪の怪人の企みは、順調に成功していると言っているだろうか。

「こんな場所で、なんて……はっあ、んっ……で、できるわけ、ないでしょう……」

弱々しく金色のツインテールを揺らしながら、最悪の瞬間を数秒でも延ばそうと必死に抵抗する変幻ヒロイン。悪の掌の上で踊らされている今、それも無駄であると理解しているが、簡単に屈するわけにはいかなかった。

「何を言っておる。今までも外で何度も漏らしておるじゃろうが。屋上でバイザーに、公園では自分にかけておったか？ それに先ほども戦闘員達に遊ばれて失禁しておったなあ」

「そ、それ、はあ……」

度重なる調教失禁の記憶が、デブロの口から紡がれる。今回が初めてではない。むしろ多いくらいの回数が、変幻ヒロインの心を抉った。

事実である以上否定もできず、特別な薬品を使用されてもいない為に言い訳もままならない。恥辱の記憶は甘美な刺激となり、更なる放尿欲求として変幻装姫の白い肌を汗で濡らす。

「我慢は身体に毒じゃぞ? 仕方ないのう。優しいわしが手伝ってやろう」

豚怪人の言葉に反応するよりも早く、首輪に繋がれたヒロインボディが本人の意思を無視して勝手に動き始めた。

「ひゃあひつ……!? い、今動かしてはあ……も、もれて、しまいますのおつ……」

何かの拍子で容易く、張り詰めた風船が破裂しかねない状況で、普段通りに動かされる身体。自分がどんな体勢にされているかもわからないまま、振動で漏れかける汚水を塞ぎ止める。

耐えることに全力を注ぐその顔は今にも泣き出しそうで、ギリギリと引つ張られて潰れる豚鼻顔も合わさり、過去の凛々しさは微塵も感じられない。

「これでわしもよく見えるわい」

体勢の変化は時間としてはほんの一瞬だったが、尿意は一気に肥大化し痛みすら覚えそうなほどで、倍增する汗の量がそれを物語っている。

苦しげに息を吐くシャインミラージュがゆっくりと顎を下げると、大きく股を開き膝を折るお座りポーズを取らされていた。様々な恥液に塗れた股布をデブロの意思でずらされ、同じくグシヨ濡れとなった無毛の秘部が露出する。変身後の様々なコスチュームに対応する為に、小まめな手入れを欠かさない結果だが、今はそれが子供のようで逆に恥ずかしく

感じてしまう。

「ほれほれ、さっさと漏らさんか」

「くひっいいい!? そ、そこお……突いては、ひぐっ……あ、ああ……だめ、ですわあ……ひいつ、あああつつ!!」

デブロのステッキの先端が、ベツトリと張りつくコスチュームの上から下腹部を突き始めた。金属の冷たさに、身体の内部分まで刺激するかのような圧力に、もう破裂間近。

グリグリと何度か押し込まれた後に次はその下へ。段々と位置が下がるにつれて刺激も増す一方で、変幻ヒロインの肢体は限界を訴えて震えている。

「本番はここじゃないと言っておるじゃろ。もう諦めんか」

漏らすまでは次の段階には進まない。解放されるわけでもないのに無駄に耐える変身ヒロインへと、デブロは押し込んでいたステッキを引き、掬い上げるように振った。

「ひっいいいぐ!? あ、もう、無理ですのおおっ……もれる、おしっこ漏れるううううつつ!! おおっほおおおおおつつ!!」

ビチン!! 露出したヒロインマンコへと直撃する怪人の一撃によって、塞き止めていたダムは決壊させられた。

じよろろろおおおおおおおつつ!!

溜め込まれていた分、盛大な勢いと音を鳴らして地面へと注がれる大量の黄金水。耐えてきた時間と苦しさだけ、放出する解放感は比例し、雌豚ヒロインを恍惚の悦楽に染め上げる。

「ブヒヒヒッ!! 出とる出とる。溜めていた分だけ凄い勢いじゃのう」

「う、うそですわあつ……おほおお! ほおつお!! これ、射精みたいに……気持ち、よくううつ!? ほおおおおつ、おひいついい!?」

だが放尿の快感はシャインミラージュの予想を遥かに上回っていた。そう、まるでふたなりチンポから射精した時に似た、圧倒的な快感。

細い尿道が熱い小水によつて刺激され、噴出口から濁流のごとく溢れる放出感に脳が掻き乱される。デブロ以外に見られていないとはいえ、路上での公開小便という背徳的な恥辱に後押しされ、シャインミラージュの理性は断ち切られた。

「くうほおお!! い、イクううつ……おしっこしながら、いつてしましますのほおおつ!! んうほおつ、んおつおおおひいいいいいん!!」

少しも考えが及ばなかった放尿による暴力的な悦感に負け、今も続く黄金水の排泄音の中で絶頂宣言しながら、豚鼻ヒロインは無様なアへ顔を晒す。

雌豚家畜のお漏らし絶頂を見ながら、デブロは「まだまだ序の口じゃぞ」と愉悦に満ち

た笑みを見せた。

正義の変身ヒロインの無毛の園から噴出する被虐と恍惚の黄金水は、軽く三十秒以上は勢いを保っていただろうか。

その間に絶え間なく刺激される細い恥穴が、忘れ難い射精の激感に似た悦楽を与え続け、シャインミラージュは敗北の嬌声を響かせ続けていた。

（お、おしっただけでだ、なんてえ……それに、こんなに、大量に……）

全てを出し終えた後も、同じポーズで固定され頭だけを地面に向かされた。本当に自分で出したのかと疑いたくなる、大量の黄金水によって濡れるアスファルト。激しい勢いに飛散した排泄水によって、ブーツが更に惨めに穢れてしまっている。

目を覆いたくなる恥辱的な光景に、しかし自由を奪われた身体はそれも許されない。ただただ、何かの罰のように己が出した水溜りを見続けるだけ。抗えない恥辱に、頭が沸騰しそうだ。

「うわ、汚ねっ」

下に意識を取られていた中で、不意に頭上から男の声が聞こえる。その汚物を見るような声に、まさか見えているのかと、シャインミラージュは衝撃と恐怖に息を呑んだ。

確かめたくとも四肢は動かず、頭も微動だにしない。ドクンドクンと心臓が高鳴る。大

丈夫だと自身に言い聞かせても、この瞬間にデブロが鎖を手放していない保証などどこにあるのだろうか。羞恥絶頂からの動揺に、自然と呼吸が荒くなる。

絶望すら感じる変幻ヒロインの耳へと届く足音が背後へと迫ると、緊張で身体が強張った。ギュッと瞳を閉じて、今もデブロが鎖を握っていることを願うシャインミラージュ。

背後の人影は黄金水を避けて排泄姿の美少女ヒロインの横へ。緊張が最大限にまで高まる中、そのまま立ち止まることなく前へと進んでいった。

(……大丈夫、でしたのね)

今も姿は消えたままという安心感に、心の中で深い安堵の息を吐く。限界まで鳴り響いていた心臓の鼓動は簡単には戻らず、今も噴き出した汗が滲んでいる。

それは確かに緊張や恐怖からくるのが多くを占めてはいたが、やはり、奥底から生じるマゾ願望もまた手伝っていた。人の目に晒される被虐の欲望の火が身を焦がし、変幻装姫という存在を芯から溶かそうとする。

「ブヒヒヒ！ 見られておらんで残念じゃったのう。まあ、小便はしっかりと見られたわけじゃがな」

デブロの嘲笑が発火材となり羞恥と怒りの炎が燃え、一瞬で顔が熱くなった。それが起因としてではないが、固まっていた身体の自由が戻ったのを理解すると、キッと頬を赤く

染めた状態で豚怪人を睨みつける。

ほんの数分もしない前では、瞳に涙を溜めて湧き上がる恥水快感に高らかに喘ぎ叫んでいた少女とは思えない眼光。気高い正義のヒロインの矜持を乗せた視線はしかし、やはり悦楽の潤みが混じっていた。

「う、うるさいですわ……!! それよりもデブロ、あなた……わたくしに何かしましたわね……っ!!」

放尿時に爆発した、予想も想像もしていなかった脳を溶かす濃密な悦感。今までの人生の中で尿道を駆ける熱い奔流に、ほんりゆうここまで濃密な恍惚を味わったことはない。

生徒会の会議などで催した際、やむを得ず我慢した後には淡い解放感に心地よさを得たことはある。しかしこれは、まるで神経が剥き出しになったかのような、全身を狂わせる性感帯の一つだ。

人間の身体はこうなるようにできてはいない。それも、ここまで急激な変化など通常では考えられない。確実に怪人の能力、もしくは未知の道具が使用されている。そう確信しての言葉だった。

「貴様が気持ちよさそうに寝ている間に、少し薬を塗らせて貰ったのよ。効果はもうわかっておるじゃろう?」

「この……下種豚あ……!!」

目が覚めた時の小さな感覚を思い出す。目の前に現れたデブロの存在に気を取られてしまったが、意識が覚醒する直前、秘裂への奇妙な感触は確かにあった。

それが尿道改造の薬なのだと、言葉にされずとも、もう身体で理解させられてしまっている。尿意は治まったものの、細い排泄道がジンジンと快楽の残滓を主張する。また一步、ダーククライムの望む奴隷へと近づいた事実には、罵倒する声が震えた。

「何とでも言うといいわい。わしがすることは変わらぬしな」

「ああぐっ?! ひ、引っ張らない、でえ……」

散歩の再開と鎖が引かれ、シャインミラージュの苦悶の声が漏れる。恥辱のプレイも終わり首輪の効果が切れている為、地面に手をつく雌家畜のポーズは自らの意志でだ。

変態的な絶頂によって弛緩する身体に鞭を打ち、引き摺られるようにして歩を進める。
(お、オマンコ出したまま……ふう、んっ……おしっこで、濡れてえ……)

排泄後にコスチュームを戻すことを許されず、また拭くこともできていない為に、露出し濡れる恥部が朝の空気に触れてしまう。ひんやりとした感覚は、変幻ヒロインに自らの痴態を自覚させるに十分な刺激だ。

身を震わせる屈辱に俯く顔を上げれば、そこには悠々と歩を進める豚怪人の後姿。強

制的に引つ張られ、縦に広げられるヒロインの豚鼻はヒクつき、常にお前は雌豚なのだと
言われているように錯覚する。

幹部達の中でも、人間としての尊厳を踏み躪る最低の調教とも思える雌豚散歩。学園の
時以上にエスカレートする恥辱の行為は、シャインミラージュの身体へと変態快感を深く
刻む。

ふと、デブロの歩く速度が下がり、少しずつ二人の距離が縮まっていく。丁度横に並ぶ
形になった際、いぶかしむ変幻装姫の眼前に、再び哺乳瓶が突き出された。

「歩きながら飲むじゃ。先ほどと同様にしっかりと吸いつくんじゃぞ？」

満タンまで入った強力な利尿作用を持つミルクを前に、シャインミラージュの表情が自
然と弱気に歪む。

相手を辱める為ならばどんな非道な行いもする悪党だ。十分に可能性はあった。しかし
高貴な令嬢ヒロインにしてみれば、わかっていたとしても先の強烈な快感と恥辱を思えば、
とても積極的に動けるものではない。

「また、させようというのですわね……う……んうつ、んうぶつ!? んんうむつ、ちゅじ
ゆうつ!!」

開いた口に押し込まれるゴム製の先端。つべこべと言わせる気もないと行動で示すデブ

口へと逆らえず、シャインミラージュは横を向いたまま、白い毒液を吸い出し始めた。

一度目と変わらない吸い辛さは、そのまま豚鼻装姫の顔を惨めな吸引面へと変えていく。「歩くことは心配せんでいいぞ。わしがちゃんと誘導してやるからのう」

顎を上げた状態でのミルク吸引に意識を取られ、チラチラと横目で前方を確認しながらの前進は、必然的に速度が下がる。

横に並ぶ怪人と首輪ヒロインだったが、少しずつその差が出始めた頃、ジャラリと鎖を鳴らす音の後に、デブロの言葉が続いた。

（……こんな奴に手綱を握られて、どんなことになるか……さっさと飲んでしまいませんか……）

暗に遅れることを許さないとやっているのだろう。ダーククライムの怪人の言葉など本来ならば信じたくはないが、中途半端な状態で怒りを買う、新たな恥辱が追加されるくらいならばと、一度臉を閉じて開くと哺乳瓶へと集中した。

「んんうっ!! んんううっ……ふうう、じゅずずううっ!!」

耳障りな音を立てての強烈な吸引。通常の甘いミルクと違い、口内は苦味に支配されていく。

この液体を全て飲み干せばどうなるかは、先の結果で十分にわかっているが、それでも

しなければならぬ。

「ブヒヒヒッ。いい顔じゃのう」

醜惡に笑いながら見下ろすデブロの視線が、必死にミルクを飲む豚鼻ヒロインへと突き刺さる。

顎を上げて吸いついている為に、フックによって伸びる二つの穴は丸見えであり、変幻装姫は誰にも見せたくない無様顔を憎き豚怪人に見せている状態だ。

（くう、んっ……まだ、半分も飲んでいませんのに、もう……おしっこが……）

怒りと羞恥に燃え上がる身体を抑え、視線は哺乳瓶の中の波打つ液体へ。飲む勢いは最初の時よりも強いと思えたが、それ以上に、下腹部から湧き上がる尿意が一気に強まった。効果を体験してしまっているからなのかはわからないが、膀胱が爆発しそうなほどに熱くなり、じんわりと汗が滲む。

「んん、もう小便が出そうなのか？ 全く正義のヒロインの癖に我慢のできん奴じゃのう」

「んんじゅっ！ じゅうぐ、んんっちゅうう……!!」

（こんなところで、漏らしなんてすれば……それでは、また飲まされてしまうかもしれないもの……）

この散歩の終着点までに、デブロは何度かの恥辱を与えようとしている。二度目の放尿

調教もまた、特定の場所で行おうとしているもので間違いない。

そうであるならば、このような道の途中で漏らしてしまえばおかわりが待っている。今までの調教の経験と、デブロの性格から考えれば確実だ。

下品に哺乳瓶の乳首をしゃぶりながらも、弱々しく首を振り否定する。しかし時間が経ち、身体に取り入れる量が増えるほどに、早く解放されたいと膀胱内で暴れ続けている。

（も、もうすぐですわ……大丈夫、わたくしは……正義のヒロイン、シャインミラージュですよ……こんな、ことで屈したりは……）

じつとりとした脂汗が穢れた身体を濡らし、唯一呼吸のできる鼻フックされた二つの穴がひくひくと恥ずかしく動いた。必死な呼吸の証を見られる屈辱も、それ以上の瞬間を前にすれば考えている余裕はない。

「我慢は身体に毒じゃぞ？ 漏らしたければ漏らせればいい。その分はまた飲んで貰うがのう。ブヒヒヒッ」

（やはりそうなりますのね……んふう、んんっ……誰が、デブロの望むようなことをするのですか……）

豚怪人の煽りの内容は想像通り。絶望すら浮かぶ極大の尿意に四肢を震わせながらも、改めて決意を固める。

歩む速度を落とせば、その分到着までの時間が必要となる。どの場所で二度目の放尿恥辱を味わせるつもりかはわからないが、一秒でも早く到着しなければ、シャインミラージユの意志に反していつ身体が限界を迎えるかわからない。

「んんんっ!!　じゅぶ、ちゅぶうっ……んぶりゅ、じゅずうう……っ!!　ん、ふはあっ……の、飲み、終わりましたわ……くう、ふうっ……!!」

我武者羅に手足を動かしながら、目の前の毒液へと吸いつく。頬をへこませ、下品極まりない吸引音を奏でる様は、とても正義のヒロインとは言えない。しかし、今できることはこれしかなかった。

視界に入る白い液体がほぼ消えたのを確認し、最後まで一気に飲み干すと、ネットリとした白い液体を散らしながら急ぎ口を離した。

反抗的な目つきはそのままだが、苦しげな呼吸に次々に湧き上がり滲む汗。震える声は限界間近をデブロへと教えているのと同義で、当然のように察した憎き豚怪人はニヤアつと笑った。

「おお、全部飲む前に漏らすかと思ったが、頑張ったのう。ほれ、次の場所に到着したぞ」「……と、到着……?　特に、何も……ふうう、んくっ……あ、ありませんけれど……?」デブロの言葉に周囲を見渡してみても、特別変わった部分は存在しない。駅前に着し

たわけでもなく、特殊な物体があるわけでもない。

代わり映えのしないコンクリートの道に存在するのは、どこにでもある一本の柱。数メートルの感覚で存在する、電柱だけ。

「何を言っておる。外で小便をする家畜には相応しいじゃろう?」

ポンポンと、デブロの手が冷たい円柱状の建造物を叩いた。野外での放尿をする雌豚ヒロインには、この場所がお似合いだということ。

「ここでたつぷりと出してマーキングしてしまえ。この街は、この場所は正義の小便ヒロインシャインミラージュの縄張りじゃとなあ。ブヒヒッ!!」

（で、電柱におしっこを……い、いえ、でもこのくらいなら……それに、もう我慢も限界ですわ……）

神経を逆撫でる嘲笑も、今にも爆発してしまいそうな膀胱からの強烈な尿意を思えば、些細なことに聞こえる。

一度してしまった影響もあるのだろう。気高き変身ヒロインは、野外での変態行為に対する抵抗は僅かに薄まっていた。

デブロが鎖を握っている限り誰にも姿は見られず、周囲を確かめても幸運なことに現状人影はない。お膳立ては整っている。であるならば、もう恥ずかしがって躊躇ってはいら

れない。

「わ、わかりましたわ……この、電柱に向かって……おしっこを……ひいぐっ!!」

デブロが悦ぶであろう、下品に股を開いた状態で電柱へと身を寄せる。豚怪人を背後にしながら、今にも盛大に尿道口から多量の黄金水が噴出するかと思った刹那、ピタリとシヤインミラージュの身体は止まり、首輪が引っ張られた。

「ああ……お、おしっこ、止まって……中で、暴れているみたいですよ……で、デブロ、どうして……」

「誰がそんな格好で出せと言ったのじゃ？ 電柱に引っ掛けるのならば相応のやり方があるじやろうが。高く脚を上げて、犬のようにするんじやよ」

最初と同じようにさせるつもりなどなかったのだ。首輪をした人間以下の雌豚ヒロインの二度目のおしっこ漏らしは、更に尊厳を崩壊させるポーズが強要されてしまっていた。

「はあ、ううつん……ぼ、膀胱が、破裂しそうでえ……こんな、屈辱的なあ……ああ、でも……も、もう……」

溜め込まれた黄金水をぶちまける寸前で止められた、常人では体験できない焦らしプレイにも似た感覚に苛まれながら、変幻令嬢はふるふると、肉づきのよい太ももを片方上げた。

思考能力を破壊する暴力的な願望を前に、身体が簡単に屈服してしまうのは仕方のないことなのかもしれない。

首輪をし、鼻フックをされ、戦闘員達のザーメンに穢された身体で、秘裂を晒しながら電柱へと股を開く姿に、高貴な変幻ヒロインの面影は微塵も存在しなかった。

「いいじやろう、ポーズは合格じゃな。後はぶひぶひ言いながら、小便漏らし宣言をすれば自由にしてやるかのう」

デブロを前にして、脚を震わせながら恥液に濡れた秘部を見せる排泄ポーズだけではなく、下品な放尿宣言まで追加されてしまう。

だが今のシャインミラージュに、それに対しての反論も反抗もすることはできない。無駄だということも身に染みて理解しているが、何よりも早くこの苦しみから解放されたいという感情が優先されている。

「……わ、わたくし……雌豚家畜ヒロインの……ぶひ、ぶひいんっ……し、シャインミラージュが……今から、この電柱に……き、汚いおしっこを、ぶちまけますのお……! ぶ、ぶひいっ……最後の一滴まで、出す姿を……ご、ご覧になってください!! ぶひっひいひい!!」

「ブヒヒヒッ!! やはり耳に心地よいのう。ちゃんとできた家畜には褒美をやらんとなあ」

内容は指示されたわけでもなく、今までの調教で無理やりに刻まれた経験と知識から、自然とデブロが満足するようなモノ。

終わりが近づくにつれて拡大していく、滑稽な豚声交じりの屈服に等しい宣言は、豚怪人を大いに満足させ首輪の能力を解除させた。

「んひいいいいいつつ!? あはあああつ……おしつこお……おしつこ、またつ……出てへえつ!! んほおおつつ、おほおつひいいいいいつつ!!」

じよろろろおおおおおおつつ!!

途端、直前で強制的に塞き止められていた排泄液が弾けた。溜め込まれていた中身が弾ける爆発的な快感は、先の放尿と同等かそれ以上。

片足を上げた変態ヒロインの股間部から止め処なく溢れる黄金水は、下品な音を立ててビチャビチャと硬い円柱を濡らす。

「んおおおつつ!! おほおつ、あひいいいいつつん!! ぜ、全然、止まりませんのおおつ……まだまだでるうううつつ!! ぶっひいいいい!!」

黄金の濁流に、やはり思考はいとも容易く押し流され、普段の高貴な振る舞いなど弾けて消えた。今存在するのは、両手を地面につき片足を上げて小便を漏らしながら喘ぐ一匹の雌家畜。



「ブヒヒヒッ!! 正義の变身ヒロインが小便しながら鳴いておるわい」

過去の調教によって蝕まれた変幻令嬢は、脳を溶かす悦楽に狂わされながら、無様なアヘ声の中に惨めな豚の鳴き声を交ぜていた。

堪らなく恥ずかしく屈辱的なおしっこポーズは、流れ出る黄金水からの劇的な快感を倍増させる、マゾ雌家畜の本能をこれでもかと刺激する。

極上の興奮にプライド高い令嬢の表情は快楽に乱れ、自然と恍惚の笑みを浮かべていた。出し続ける限り止まらない快感の連鎖に、自らの意思で上げた脚は震えながら、白いブーツに包まれたつま先がピンつと伸びる。

（はあっひいいいいっ!? め、雌家畜ポーズで、おしっこ出すのお、身体が……熱く、なつてへええっ!! おっほおおっ、んおおおひいっ!!）

認めたくないのに、身体の正直な反応が頭に浮かび上がる。そんな自分自身を最低だと思いつつも、改造されて生じる射尿快感には逆らえない。

耐える意志があれば固く閉じる口も力なく開き、盛大に嬌声を響かせる度に唾液を垂らしていく。

「ま、またイクううっ……おしっこしながらあ、デブロに見られてイってしまいますのほおおおっ!! あっひいいいいいいっ!!」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

mille-feuille

ハマる本格アクション!!
変身ヒロインエッチゲーム!!

ドシンはイベントCGと
ドット風CGを切替可能!



変幻装姫 SHINE シャインミラージュ MIRAGE 敗北のカウントダウン

原作・シナリオ:でいふーと 原画:こっぱむ
キャラクター原案:高浜太郎

◆価格パッケージ版3,700円+税 / ダウンロード版 3,500円+税 ◆OS:Windows 7以降(日本語版)
◆ペリトスクロールアクション+アドベンチャーゲーム ◆女性フルボイス
※18歳未満の方はご購入できません。



パッケージ版・ダウンロード版

好評発売中!

<http://www.mille-feuille.jp/>

制作:ミルフィーユ

販売:株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌！

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌！

正義の乙女が犯され、敗北絶頂をキメるアンソロジー！！

【偶数月】
隔月発売
2・4・6・8・10・12月

【奇数月】
隔月発売
1・3・5・7・9・11月

【電子版】
毎月配信
書籍版は奇数月
発売！



ニ次元
ドリーム
マガジン
2D DREAM MAGAZINE



COMIC
UNREAL
アンリアル



EXS
敗北乙女
エクスタシー
SHOJO EXOTIC DISTANCE

あなたのキモチイをお手伝い！キルタイムのアダルトコミック誌
全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中！

電子書籍版も
好評発売中

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコビル TEL: 03-3555-3431 (販売) FAX: 03-3551-1208

最新情報は公式サイトへ！キルタイムコミュニケーション

検索

二次元ドリームノベルズ

金肉英雄
タイタス

日常に密着したエロス、
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル！

小説家になるこの男性向けサイト
「アクトアインノベルズ」
から書籍化！

姫騎士 クラッシュ！

女刑事美優
美優は自らの身体で...

リアルドリーム文庫

ビギニングノベルズ

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

あとみっく文庫

呪詛喰らい師

あの人気作品の
外伝作品もあり！
電子書籍で読める「エッセイナル」

フリーダム120%!?
ジャンルにとわれない
ドキドキラブ！

タイタス
金肉英雄

二次元ぷち文庫

夢世界
ドキドキ
ラブ
タイタス

ドキドキラブな
ハーレム系
ライトノベル！

二次元ドリーム文庫